

フレックススクールにおけるグループワーク授業の実際 - 生徒は授業をどう受け止めたのか -

小貫 達也

(学校臨床心理専修)

1 . 問題と目的

近年、地域社会のつながりの希薄化や少子化などを背景に、子どもの対人関係能力育成の機会が減少している。こうした状況を少しでも打破するために学校教育現場では、グループワークを応用した取組みが活発化している（丹治 2011）。そして現在、社会では、人間関係の希薄化などから人とのかかわりそのものが求められるようになってきている。このような状況の中で社会の要請に応えるべく、学校教育現場においては、「かかわる」ことに焦点をおいた子どもたちの実態把握をする必要があると考えられる。

そうした現状を受けて、茨城県内にあるフレックススクール県立 A 高校では、外部講師によって道徳の授業の一環としてグループワーク授業を実践している。そして筆者はグループワーク指導の補助体験の機会を得た。しかし、そこでは子どもたち 1 人 1 人がグループワーク授業をどのように受けとめ、どのような心の状態にいるのかということを十分に理解するまでには至らなかった。したがって生徒の視点に立ったグループワーク授業の在り方を検討する必要があると考えた。

國分(1997)は、臨床経験と精神力動論の局地的見地から構成的グループエンカウンター(SGE)に現れる抵抗として、超自我抵抗、自我抵抗、エス抵抗の3種類を挙げている。また、片野・國分(1999)は、抵抗を「エクササイズを求める対人行動に対する参加者の回避反応」と定義した上で、SGEにおける抵抗の研究として、22項目からなる「抵抗測定質問紙」を用いて、「構成への抵抗」「取組みへの抵抗」「変化への抵抗」の3種類の抵抗を見出している。ここで、抵抗感はいわばネガティブな概念であるが、そのネガティブな通常光の当たらない所を見ることで、光の当たる別の側面がより明らかに見えてくることがあるのではないだろうか。つまり、生徒がグループワークをどのように捉え、どのように感じたのかを知り、それらがどのように影響したのかを抵抗感というマイナスの視点から吟味することで、グループワークの本質的な側面を浮き彫りにすることができるのではないかと考えられる。このように抵抗感は、「生徒の視点」に立ったグループワークを考える上での鍵概念であるといえる。

以上で述べたように、フレックススクールの生徒を対象として、臨床的な視点から、質的な研究を行うことが必要であると考え、「参加者の視点から見たグループワーク授業の実際」を明らかにすることを目的とした。

2 研究の方法

研究は、片野・國分(1999)の「抵抗測定質問紙」の質問内容を参考にしながら、調査への協力を承諾してくれた A 高校の 1 年生・2 年生男女 12 名にアクティブインタビューを行った。そして得られたスクリプトを KJ 法に準じた方法で分析した。その上で、正保(2016)のグループワーク活動の 3 要素(かかわる・理解する・表現する)や、心を育てるグループワークを支える 3 つのマインド「(子どもの中には成長への力があると)信じること」、「楽しむこと」、「開くこと」を授業の前提として踏まえながら、片野・國分(1999)の 3 つの抵抗感(構成への抵抗・変化の抵抗・取組みへの抵抗)や、遠藤(1995)の自己開示抵抗感などを視点として子どもたちの授業の受けとめ方について検討することとした。

3 結果と考察

12 人の対象者から得られたトランスクリプトを要約し、概念化したデータを表 1 のカテゴリー対応表にまとめた。それらをもとに、グループワークの実際についてそれぞれ検討し以下のような結果を得た。なお、調査協力者 12 名すべての名前は仮名にした。

表 1 カテゴリー対応表

	た か し	よ し お	は る か	く る み	い ち ろ う	お り え	よ し え	し ん い ち	あ つ し	い さ む	い く お	ま さ や
(1)【グループワークの抵抗感】	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
(2)【グループワークと他の授業】							○	○	○			
(3)【グループワークと担任】			○	○				○	○			
(4)【グループワークと指導者】			○	○				○	○	○		
(5)【グループワークの抵抗感なし】	○	○	○	○		○	○	○	○			
(6)【グループワークは楽しい】	○		○	○		○	○	○	○	○		
(7)【グループワークのへ両価的態度】		○		○	○			○	○	○		○
(8)【グループワークの効果と変化】	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○

- (1)【グループワークの抵抗感】においては、生徒の心にある「行動の失敗」、「自分であることの失敗」、「他者からの受容・承認の失敗」、「失敗の記憶」への恐れが見出された。
- (2)【グループワークと他の授業】においては、生徒は、「他者からの受容・承認」の欠如、「学びの躓き」といった失敗体験に満たされ、成功体験が乏しいという現状が推察された。
- (3)【グループワークと担任】においては、生徒は、「他者からの受容・承認」が不足していることが示唆された。
- (4)【グループワークと指導者】においては、グループワーク授業とその指導者は、生徒にとって成功体験を実現させてくれる存在であったことが見出された。
- (5)【グループワークの抵抗感なし】においては、グループワーク授業では、生徒は、わからないことがないという「学び」の成功体験を得られることが示された。

- (6)【グループワークは楽しい】においては、生徒は、グループワーク授業で「他者からの受容・承認」、「学び」などの成功体験を積み重ね、生徒にとって日常の失敗体験を忘れさせるものであったことが推察された。
- (7)【グループワークへの両価的態度】においては、指導者や友達によって「他者からの受容・承認」という成功体験を得られる生徒と、それらを求める気持ちは心の奥にあるが、表面的に拒否的な態度をとっていると推察される生徒の存在が見出された。
- (8)【グループワークの効果と変化】からは、失敗への恐れから成功体験への変化があることや、「他者からの受容・承認」という成功体験から「学び」の成功体験への進展があることが示された。

4．総合考察

フレックススクールにおけるグループワーク授業は、総じて生徒たちにとって「失敗への恐れとその克服」の体験であったと考えられた。生徒たちがどのような失敗を恐れ、どのように授業を体験しながら、どのようにそれらを克服していったのかという流れについて考えた。

まず「失敗への恐れ」が【グループワークの抵抗感】という側面から示された。このような失敗を恐れる心は、どのような背景から生まれたのかを検討すると、生徒のグループワーク授業での成功体験と他の授業での失敗体験が考えられ、それらは、【グループワークと他の授業】の構成という側面や【グループワークと担任】という側面から示された。一方、失敗体験から逃れ、成功体験が獲得される様子が【グループワークと指導者】の生徒の言葉から推察された。生徒が、グループワーク授業の回数を重ねたことで成功体験を積み重ねていくことを【グループワークの抵抗感なし】、【グループワークは楽しい】が示した。一方で、グループワーク授業における成功体験と成功体験が得られないととれる生徒の発言から、成功体験を求める気持ちは心の奥にあるが、表面的に拒否的な態度をとっていると推察される生徒の存在が【グループワークへの両価的態度】から見出された。そして、「失敗への恐れ」(抵抗感)から成功体験(他者からの受容・承認)への変化、成功体験(他者からの受容・承認)から成功体験(学び)への進展へとつなげていったことが【グループワークの効果と変化】で考えられた。

フレックススクールの生徒たちにとって、グループワーク授業は、「失敗への恐れとその克服の物語」であり、それらを支える大前提は、1年間を通して定期的に授業が実施され、体験が積み重ねられたことであると考えられる。それらが、生徒たちの変化と成果をもたらしたと考える。実際には、必ずしもすべての生徒が失敗への恐れを克服できた訳ではなかったかも知れない。しかし、そのような生徒たちにとっても、今後この前提があれば、指導者の早期の配慮や対応などによって、克服できた生徒同様に失敗への恐れを克服できるかもしれないことが今回の研究で示唆されたと考えられる。今回の研究において、フレックススクールのグループワーク授業の実際から、グループワーク授業が生徒が自らの人間関係にかかわる問題や悩みを認識する(自己覚知)することのきっかけとなること、生徒が抵抗感と向き合い、克服していこうとする態度(自己洞察)の前提、土台となること、今後の学校の教育相談における個々の生徒理解と実態把握の新たな手法を考える土台となることなどが示されたと考える。

